

琉球大学学術リポジトリ

蔬菜価格の変動と輸出・輸入

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 友寄, 長重 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/19585

で、鶏が卵も産まず、又やせもせず、然し健康に生きてゆくための飼料であるが、卵を産むときには、維持飼料の他に産卵飼料として産卵一〇%毎に二〇羽に付一日一封度即ち二〇羽を加えなければならぬ。例えば二〇羽の白色レグホン種で維持飼料として一日二九ポンド産卵飼料として五〇%産卵のときには五ポンドを加えて、合計二十四ポンド、七〇%産卵のときには維持飼料一九ポンドに産卵飼料七ポンドを加えて二十六ポンドが一日の飼料消費量となる。

白色レグホン種の場合の産卵率と飼料消費量は次の如くなる。

産卵率 一〇〇羽一日の飼料

一〇% 二二ポンド (維持飼料 一九ポンド 産卵飼料 二ポンド)

二〇% 二二ポンド

四〇% 一三ポンド

五〇% 一四ポンド

六〇% 二五ポンド

七〇% 二六ポンド

即ち七〇%産卵の鶏は二〇〇羽で一日二六ポンド即ち二、二二〇羽の飼料を消費する計算となり、一羽当二匁食うこととなる。一ケ年に消費する餌の量は一羽当平均次のようになると言われる。

レグホン種 七五―八五ポンド

兼用種 八五―九五ポンド

産卵率の高い鶏は、もつと多く餌を食う筈である。

結 び

「アメリカの養鶏をみて」と云う何かつかみどころのない題をつけたのは、事業の経営に合理的に目をそばんづくで考えるアメリカ人の考え方を書く積りで筆をとつたのであるが、書き上げた事は最初考えた事と、ちぐはぐになつて終つた。

然し養鶏を経営するときに、収支計算ははつきるるか、又養鶏経営中最も多く費用を要する飼料について初生雛から成鶏まで

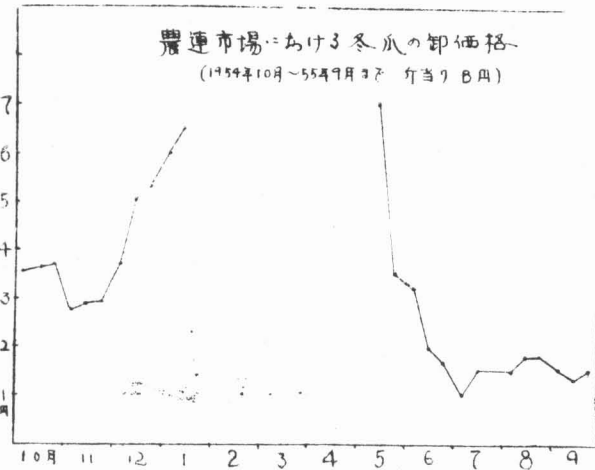
成鶏になつてから産卵中、どれだけの量を必要とするか等を計算するときの参考になれば幸である。

何処の国でも、最も大事な卵と飼料価格は、養鶏家が決定するのではなく、その時の相場であるから、養鶏で儲かる、儲からぬは其の年の景気に左右されることも大きいので、養鶏を

蔬菜價格の変動と輸出・輸入

四、冬 瓜

栽培面積はキヤベツに次ぎ第三位を占めて夏野菜として最も親しまれている。作付面積も一九三六年の八・一五%に対して



初めてから一年も経たない中に不景気に見舞われて収支償わずに事業を中止する人も多々あるのであるが、之を乗り切るのは合理的な経営、以外にないように思われる、アメリカの養鶏家と雖も同じことで苦難をのりきるために払われる努力は大変大きいものである(終) (松田 祐一)

一九五三年は九・七三%に増加した。図の価格変動をみるに十二月の抑成出荷と四、五月の早出しが高値で六月―十月は最も安値である。日本ではあまり重要蔬菜でないから輸出輸入の可能性はなく、島内だけの供給、需要の域を脱しない。

五、かぼちゃ

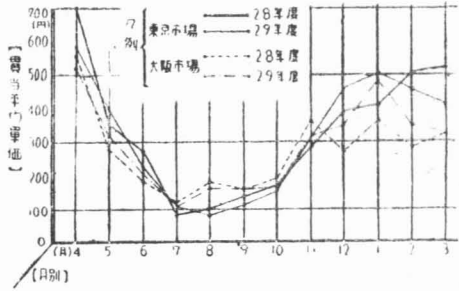
戦時中の白給菜園の奨励と共に急激に栽培面積が増えたが、現在は減少する傾向にある。

日本に於いては主食の緩和によつてカボチャの需要量は急激に低下し、価格も下落している。極く早期出荷で特別な品種で品質の良いものでないと問題にされない。琉球で一般に栽培されているカボチャは品質が悪く、自貢のカボチャを早期に量的に生産するに至らず、輸出の途は開けない。宮崎、熊本は氣候的には沖縄のように恵まれていないが、栽培技術の向上によつて、促成栽培により、沖縄より早期に出荷している現状である。

昨年七月以後の農産市場での卸値をみると、七月から十月にかけては斤当り一、五円内外で、十月以降は二円内外を保持し今年四、五、六月の早出しは二、三円程度である。

六、トマト

戦前、戦後を通じ、割合に栽培面積に変動が少い蔬菜の一つである。しかし戦前のキヤベツに代つて最も有望な輸出蔬菜で



大都市市場におけるトマトの年間の市況調
農林省農林経済局の大消費地における青果物
(日本円)

あるため、一九五二年の五五四反の作付面積に対して、輸出が開始された一九五三年には七三二反歩に増加した。一九五四度の輸出額は六百四十万円以上にも達し、東京市場での制単値(斤当りB円)三十円以上もした。

トマトは反当り取量も多いので斤当り単価七円(一九五四に輸出業者が買ひ取った価格)では他の野菜をつくるよりは有利であるから、今後最も期待出来る輸出野菜である。一九五四年に青果ミカンコンビエが沖縄の輸出トマトから発見されて以後輸出禁止になっていたが今年度からはクレンジョウする事により輸出が可能となった。

トマトは目で喰うと云うから外観と色合いが良く、口持ちのよいものでなければ値が出ない。一九五三、五四年度の二年間の沖縄輸出トマトに対する東京丸一青果会社の新倉喜一氏の批評を聞くと「東京市場で一、二、三月に入荷するトマトで量的に多いのは高知県の抑制トマトと静岡県の高菜栽培物である。沖縄からも最近入荷しているが熟度が一定せず商品価値は減じている。トマトでは特に注意したいことは熟度の点で此れに重点を置かないと完成されたものとは云えない。」と注目すべき

批評をしている。今後輸出には一定した品種を作付けて熟度を一定するように注意し、市場の人気を得るようにしなければ有利な輸出は望めない。

七、キユウリ

一九三六年の八九九反に対して一九五三年には一三九四反に戦後急激に栽培面積が増加した。

キユウリはベト病の被害が甚だしく、「キユウリあるところベト病あり。」「肥料の撒布なくして、キユウリなし。」と云われる程ベト病の被害がキユウリの生産量を支配するとまで云われている。一九三六年一八年の三年年平均反収二百十六貫であつたが戦後は肥料の使用が普及した関係が一九五二一五三年の三年の平均反収二六九貫に増加したことは喜ぶべきことであるが他の野菜と比較してまだまだである。

価格は十二月の抑制物と四月の早出物が割合に高値を呼んで売れぬきもよい。

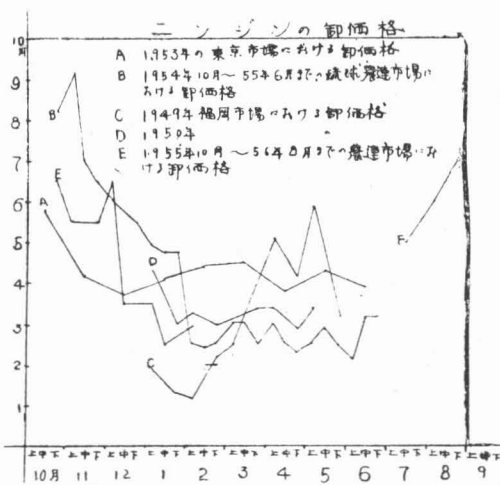
日本では十一月一五月の端境期には非常に高値で販売されるので多額の生産費を投じて温室栽培を行っているが、最近ではビニールの使用によつて促成栽培が盛んになりつつある。沖縄は気候的に恵まれていて、栽培技術の進歩が後れていることやその他種々の制限によつて、一二月には全く生産されていない。十一月一五月には日本と沖縄との価格の差からみて輸出が可能のように考えられるが、実際には生産量が少く不可能である。

沖縄では一般に熟期に達したときに収穫されているが、日本では地方により、時期により若干の相違はあるが、一定の好みがあつて決して成熟期或は発育の最終の大きさを収穫されるものではなく、未熟の内収穫される。好みを無視して成熟期までおいておくと、単価が安くなる上に全体の取量も減ずる。果菜類では一般に幼果を早期に摘る事により果実数を多からしめ取量を増すものである。沖縄では成熟期に収穫した方が有利と考える一般の慣習の故に、島内産が出廻る時季になつても一流のホテルや料亭はわざわざ日本から飛行機で輸入している。一九五四年には九一十一月に百六から二千九百二十斤(金額にし

て六万四余、斤当り単価七十二円で輸入した。その他に毎月少量づゝ飛行機で運ばれ合計九六斤(三万四余)で、斤当り一三三、四円で輸入された。

八、人参

人参は蔬菜栽培面積中第七位で総面積の四、四%を占める。戦前は日本に移出されていたが、戦後は一九五四年に六十斤程輸出されたのを始めとして、今年度五月には七万六千斤余輸出された。



農産市場に於いては十一月までの早物は単価も四一五円以上で割合に高値であるが二月以降の最盛期には有利な販売は望めない。九一十二月の端境期には日本から輸入されている。

(本稿は本学部、今年度卒業の平山良勝君の調査研究に依る。)

(友 寄 長 重)